「日本測量協会山の会」

星埜由尚（(社) 日本測量協会副会長）

昨年は、我が測量界にとって映画「剱岳点の記」がヒットし、測量･地図を広く一般の方々に理解していただく素地が作られたと大いに評価しているところである。日本測量協会は、この映画制作に様々に協力させていただいたが、協会としても剱岳に登らねばなるまいと村井俊治会長が提案され、私もすぐさま賛同し、剱岳点の記 100 周年当時国土地理院北陸地方測量部長で、新たに三等三角点の設置を指導し、剱岳には 10 回近く登頂した測地基準情報部長の山田明氏、北大山岳部 OB で GIS 研究所主任研究員の平田更一氏というリーダを得て一昨年の夏剱岳の登頂に成功した。

剱沢山荘から見る剱岳

それを機に村井会長の音頭で「日本測量協会山の会」が発足し、測量に因んだ山を一年に一山登ろうと言うことになった。以下は、一昨年の剱岳から今年の穂高岳に至る山行の記録である。

剱岳で柴崎芳太郎の偉業を偲ぶ

明治 40 年陸地測量部の大先輩柴崎芳太郎の登頂物語は、新田次郎「剱岳点の記」により世に広く知られるようになった。我が国の測量・地図史において、剱岳は最後の秘境であった。柴崎芳太郎の剱岳登頂物語は、我々測量・地図人にとっては、民族の説話である。映画界の鬼才木村大作監督により「剱岳点の記」の映画化が企画され、一昨年に始まった撮影に我が日本測量協会も協力することとなり、村井俊治会長の発案により剣岳登山を計画したのである。柴崎測量官は、明治 40 年 7 月 28 日に登頂したことが判明し、我々もこの日を目指して登ることとした。村井会長、山田氏、平田氏、私のほか、北大山岳部 OB などの知り合い関係者を含め総計 17 名のパーティであった。

夕やけの剱岳

7 月 27 日朝、立山室堂に全員集合する。室堂から、雷鳥沢までミクリガ池を通り、地獄谷を通って降りていく。地獄谷では硫黄のにおいが鼻をつく。雷鳥沢から別山乗越(べつざんのつこし)まで約 2 時間の登りである。急傾斜の道を最初の雪渓登りを含めてあえぎあえぎ登っていく。別山乗越にある剱御前小屋に着くや否や大粒の雨が降り出し土砂降りの雨になった。稲妻もピカピカ走り、雷鳴がとどろく。暫く雨宿りをしたが、雨もやや小やみになったので剱沢小屋に向かって降っていく。雷鳴鳴り響く中、剱沢小屋に３０分程度で到着した。

急峻な岩場を登る

さて、小屋に着いてから暫く雨も小やみの状態であったが、小一時間も経たないうちに突然強風と土砂降りの雨が降ってきた。またもや雷がなり、最悪の状況である。２時間ぐらいこのような強風、雨、雷が続いたであろうか。今度は一転して晴れてきて剱岳の威容を拝むことができた。その堂々として人を寄せ付けない峻厳な山襞には真に人知を超えた魔神の山との印象を誰でも持つだろう。柴崎芳太郎は、この山を見てどういう感慨を持ったのであろうか。日暮れとなり、夕焼けの剱岳に一同感激して明日 28 日の天候よかれと祈るばかりであった。

明くる 28 日、この日は、柴崎芳太郎が登頂した日である。しかし、天気は最悪である。昨夜来の強風と雨、霧も深い。雨は時折土砂降りとなり、登山可能な状況ではない。やむなく一日小屋で待機となった。

29 日、午前 3 時に起床する。未だ雨が降っている。霧も相当深い。4 時まで様子を見ようと言うことになる。暫くするうちに雨は止んできた。4 時を過ぎる頃には霧もやや薄くなってきた。4 時 15 分、山田リーダーが行きましょう、剱山荘で様子を見ますと号令をかけた。メンバー打ち揃って勇躍出発する。剱山荘につく頃には、やや見通しもつき、雨も降らず好転しているように見え、一同迷うことなく山頂目指して剱山荘をあとにする。ここからは、傾斜も増し、最初は普通の山道だが、暫く登って行くうちに鎖場が現れる。最初の鎖場は、岩の斜面を横に巻いていくが、下の方を見れば結構な傾斜で、難所として有名な蟹のタテバイは如何なるものかと脳裏をかすめる。さらに登ると一服剱(いっぷくつるぎ)と称する鞍部にでる。

蟹のタテバイを登る

まさに一服できるところで上りも下りもここで丁度一休みという所である。一服剱からが大変である。一服剱から前剱(ぜんけん)まで登っていく。ともかく足だけでは登れない。手足を使いよじ登るようにして登るところばかりである。鎖場が全部で 13 カ所あり、鎖のないところも岩棚やちょっとした窪みに足をかけ手でつかんで登らなければならない。

前剱から一旦降って鞍部に下りる。鞍部は痩せて両側の切れている。数メートルの鉄の橋が渡してあるが幅が狭く慎重に渡っていく。剱岳の頂上まで、平蔵の頭(ずこ)、平蔵のコルと登ったり降ったりしながら緊張の連続である。そしてかの有名な難所「蟹のタテバイ」に到達する。鎖とボルトを頼りに、ちょっとした岩のくぼみに足をかけ慌てず騒がず登っていく。山田リーダーが先頭で村井会長、私と距離を保ちながら慎重に手と足を動かしていく。もう少しで終わると言うところで、山田さんの前に登っていた中高年の女性が前にも後にも進めなくなってしまった。恐怖の余り岩にしがみついてしまい、手がかりが分からなくなってしまったようである。5 分ぐらい悪戦苦闘したあげくようやく最後の所を登りきった。その間、我々は、岩盤の急斜面で宙ぶらりんである。

剱岳三等三角点を前にして
日本測量協会山の会メンバー

蟹のタテバイを通過して、後 20 分ぐらいですよと言う。ところがなかなか頂上とはならない。何回か上り下りしてやっと頂上に着いた。8 時半、約 4 時間の苦行である。頂上についてまず三角点を確認する。四等三角点の古色を帯びた標石をすぐ見つけることができ、村井会長と握手して登頂の喜びを皆で味わった。気がつくと、緊張の連続でのどはカラカラである。頂上には、20 分ぐらいとどまったであろうか。風が吹き結構寒い。名残惜しいが下ることにする。下りは再び慎重に下りなくてはならない。

下りは登りとルートが異なる。登りの難所は通らずに済むが、別の難所が待ち受けている。山頂から暫く下り、蟹のヨコバイを通過する。蟹のヨコバイは、垂直に落ちた岩壁を横切る。まず最初に右足を小さくえぐられた岩棚に下ろす。そして蟹のように岩壁の小さなステップを左につたって行く。さほど距離があるわけではなくせいぜい 10 メートル程度であるが、下を見ると垂直に落ちており、ガスで下は見えないが、相当深い。垂直の高度感が恐怖心をあおる。鎖は付いているが、足を踏み外したらアウトである。蟹のヨコバイを通過すると垂直に近い梯を下る。これも足をかける順序がある。30 段近くの梯を一段一段慎重に下りていく。梯を下りるとトイレがあった。実に巧妙なところにトイレがある。少しばかりの平地に小さいトイレであるが、頂上を極め、蟹のヨコバイ、梯を通過して一安心と、丁度よいタイミングで”Nature call me”となる。

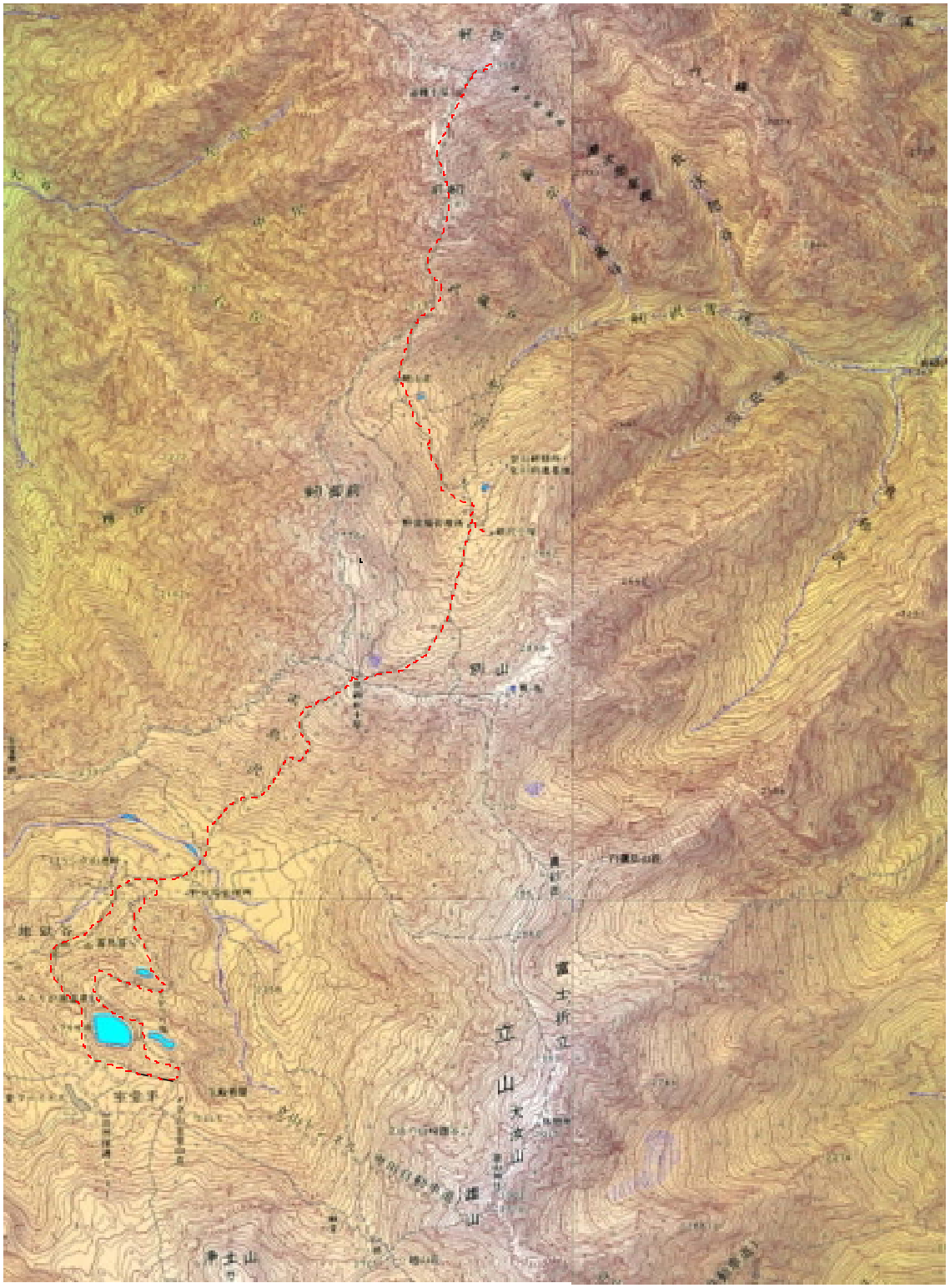
蟹のヨコバイ・梯子直下のトイレ

しかしまだまだ安心はできない。前剱を登り返し、鎖場を通過して、一服剱に到着する。一服剱とはよく言ったもので、ここまで来れば難所はあらかた終わり、剱山荘に下る。再

び雪渓を横切り、剱沢小屋に戻る。この頃には疲れが潮のように押し寄せてくる。剱沢小屋は剱山荘よりやや高いところにあるが、小屋の手前の緩やかな登りで足が言うことを聞かない。あえぎあえぎ小屋にたどり着いた。時刻は、12 時半。約 8 時間が既に経っている。

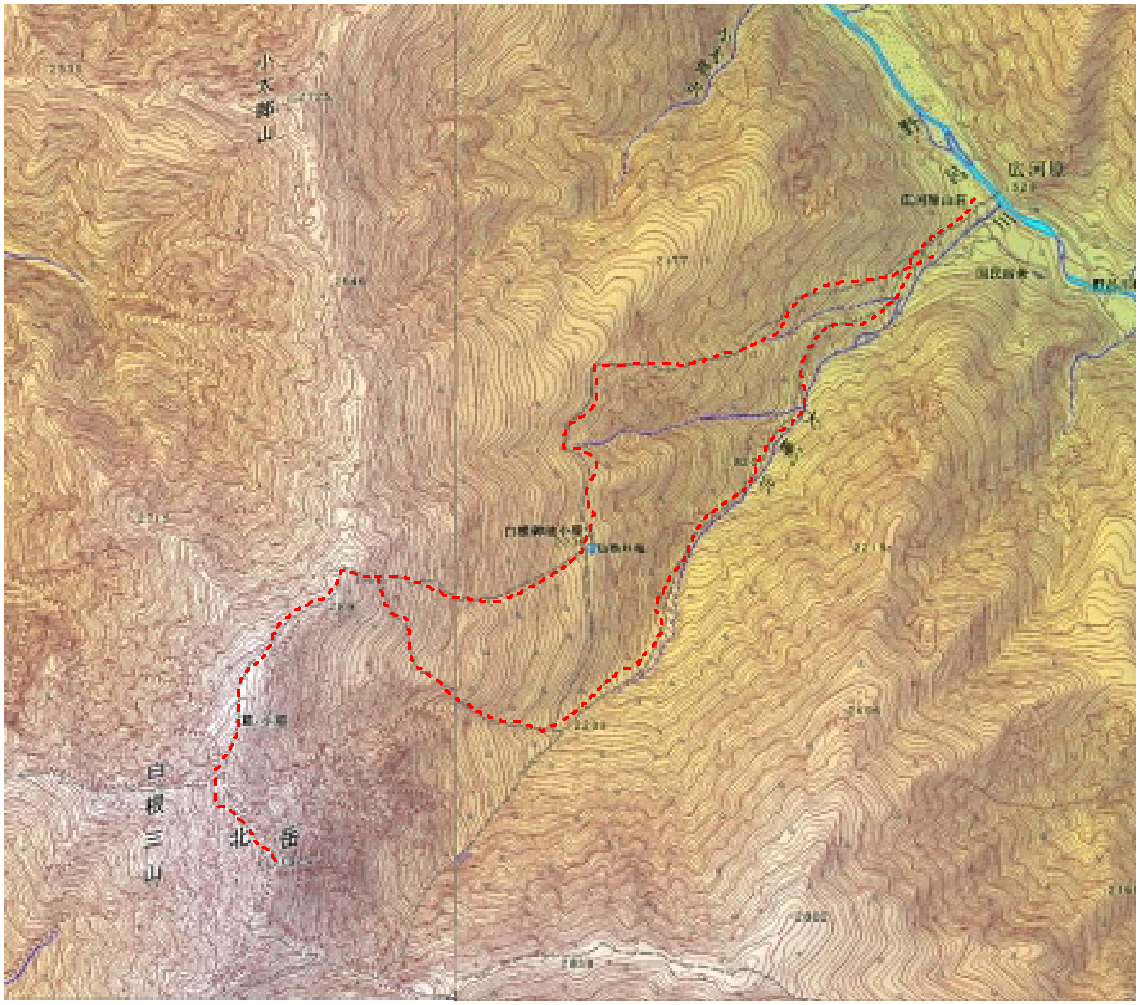
剱沢小屋から室堂まで戻る。剱御前小屋のある別山乗越まで急斜面ではないが登りである。8 時間歩いた後の足は重い。普通ならば 30 分程度の所を 1 時間かかってしまった。別山乗越から雷鳥沢まで一気に降る。室堂方面が眺められる。室堂のバスターミナルは、雷鳥沢まで下りて再び登らないといけないことが手に取るように分かり、そのつらさが今から思いやられる。地獄谷は、ガスのため通行禁止となり、ミクリが池を回っていく。ミクリが池の周りは遊歩道となっているが、その遊歩道のちょっとした登りが大変きつい。20 歩くらい進んで一休みし、また 20 歩くらい進むと行った案配である。結局、室堂のバスターミナルには、4 時半に着いた。

後はバスに乗り、美女平でケーブルカーに乗り換え、さらに立山から電車に乗って富山に着いたのは 7 時を過ぎていた。東京に帰る手段もなくなり急遽駅前のビジネスホテルに泊まり、体力を使い果たした身体を横たえたのである。



使用した地図は、(財)日本地図センターのホームページで提供している彩色地形図の一部である。

日本第二の高峰北岳に登る



北岳は、山梨県芦安村（現在は南アルプス市）にあり、間の岳、農鳥岳とともに白峰三山を形成している名峰である。深田久也の百名山の一つともなっており、夏山を中心に多数の人が登る人気の山である。標高は、3193m と日本で 2 番目の高さで、懐の深い大きな山である。高山植物が多く、北岳にのみ見られるキタダケソウが有名である。

7 月 25 日北岳の登山口広河原に集合したのは、協会から村井会長をはじめ、山田氏、平田氏、私の 4 人で、そのほか昨年の剱岳に一緒に登った方々や国土地理院の方であった。翌日の天気を心配しつつ広河原山荘でその夜を過ごした。

キバナシャクナゲ

北岳三等三角点にタッチする
日本測量協会山の会メンバー

北岳バットレス

三角点の説明板

翌日朝 4 時に起床、4 時半に朝食、5 時半に小屋を出発。少し青空もあり、まあまあの天気である。大樺沢を約 2 時間半、二俣という文字通り沢が分かれる所に達する。このあたりは雪渓があり、少しではあるが雪渓の上を歩く。当初の予定では、このまま沢を詰め、八本歯のコルという北岳直下の峠を廻る予定であったが、今年は雪が多く雪渓のトラバースにアイゼンが必要と言うことで、右俣の斜面を登る。急登が続き、小太郎尾根の上にでる。ここで富士山が少し顔を出す。鳳凰三山も雲の切れ間からオベリスクが見える。天気さえもっと良ければまことに素晴らしい眺めだろう。高山植物の花園も大変美しい。尾根を 30 分程度で 11 時半肩の小屋に到着する。

ここまできつい登りに身体も堪え、頂上は明日でもいいやと言う気がおきる。しかし、村井会長の「明日は雨かもしれないし、今日登らないと後悔することになるよ」との言葉に気を取り直し、弁当を開き、2 時間ばかり休んでいるうちに体力も回復し、是非今日中に頂上を極めようと心に誓う。

13 時半に小屋を出発し、いよいよ頂上を目指す。白や黄色の色とりどりの花が咲く中を一歩一歩踏みしめながら頂上に近づいていく。約 30 分ついに頂上に立つ。意外と広い。まず三角点を見つける。2004 年に改埋した新しい花崗岩のきれいな三等三角点標石である。協会メンバーと記念写真を撮る。説明板があり、古い標石と盤石は、芦安山岳館に展示されていると書いてある。三角点の標高は 3192.4m だが、南側にやや高いところがあり、

山の高さとしては 3193m である。しばらく登頂メンバーと記念写真などを撮り、もと来た道を肩の小屋に戻る。

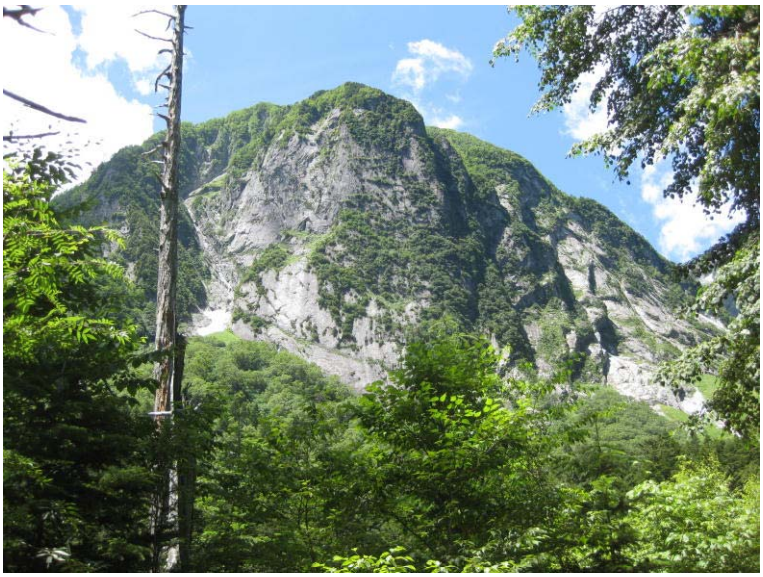
肩の小屋は満員だった。17 時頃夕食を取り、19 時頃には就寝。寝るスペースは一人半畳程度である。となりの人とすぐぶつかりなかなか寝れないが、それでも疲れているせいか知らず知らずのうちに寝てしまう。翌朝 4 時に起床、5 時半に出発。雨が降っている。雨具を着用してひたすら下る。途中白根御池小屋を通り急坂を下って広河原に着いたのは 10 時であった。

剱岳は手で登る山、北岳は足で登る山というのが私の実感である。

穂高岳三千メートル四峰を縦走する

「日本測量協会山の会」結成以来 3 度目の測量縁起登山である。今回の穂高岳、これは剱岳を 2 回登ったようなものであった。剱岳のタテバイ、ヨコバイに匹敵する難所が入れ替わり立ち替わり現れる。稜線の両側は深くえぐれた谷である。一歩間違えば深い谷に真っ逆さま、よくて骨折である。そのような岩場の難所を 60 代以上の人が年寄りの冷や水をも顧みず登ったのである。

7 月 25 日早朝、上高地に参加者が集合した。前日から上高地に泊まった村井会長、平田さんほかの人びと、夜行バスで新宿からやってきた山田さんほか、自家用車で沢渡に車をおいてきた人、それぞれ思い思いの方法で上高地に集合した。私は、前日松本駅前のビジネスホテルに泊まり、夜の明けないうちから 4 時 45 分発の電車（松本電鉄）に乗り、新島々でバスに乗り換えて上高地に向かった。6 寺 30 分頃上高地に着くとすぐ山田さんたちがいるのが分かった。挨拶を交わし、上高地宿泊組は、朝食が 7 時だから先に行くかと国土地理院の小野塚さんと一緒に涸沢小屋を目指し出発する。周りには、登山の人も大勢いるが、旅館の浴衣を着た観光客もいっぱいいる。空気はひんやりして涼しい。昨日までの猛暑が嘘のようである。



屏風岩

梓川に沿い林間の涼しく平坦な道を行く。ずっとこのような道ならば楽なものだ。1 時間も歩くと明神に達する。この辺は、登山以外の観光客も多い。さらに一時間、徳沢を経てまた一時間、横尾に着く。横尾で槍ヶ岳に向かう道と分かれる。横尾で韓国人の団体登山者がリーダーの説明を受けている。外国人の登山者は多いが、特に韓国からの人が多い印象を受ける。韓国では、最も高い山でも 2000 m以下である。3000 m級の山々が連なる飛騨山脈は魅力なのであろう。韓国人のグループは槍ヶ岳の方へ向かっていった。

横尾からは屏風岩と横尾尾根に挟まれた横尾谷を遡上していく。梓川の谷は、第四紀という地質時代（現在も第四紀の沖積世である）の最後の氷期（約２万年前が最盛期）に氷河によって刻まれたＵ字谷をなしている。横尾谷もＵ字谷で屏風岩はその谷壁である。屏風岩は、岩登りのメッカであり、相当な技術を要する、という話を同行の国土地理院小野塚さんから聞きながら横尾谷をさかのぼっていく。横尾谷に入ると道も狭くなり、傾斜もやや増し、登山路らしくなってくる。屏風岩を眺めながら１時間以上登っていくと本谷橋が見えてくる。吊り橋を渡り、日陰で一息ついて今朝コンビニで仕入れたにぎりめしをほおばる。

北穂高岳から涸沢岳への縦走路

涸沢岳の三等三角点

本谷橋からはかなりの登りとなる、あえぎあえぎ約１時間も登ると雪渓が現れる。雪渓が現れるあたりは、、そろそろＵ字谷も最上部となり、カール（圏谷）の底のモレーンが見え、その上に涸沢ヒュッテが見えてくる。いよいよ涸沢小屋ももうすぐだ。しかし、ここからが結構長い。雪渓は滑らぬよう慎重に登るので時間がかかる。涸沢小屋の手前に大きな雪渓がある。ここを慎重に越してようやく涸沢小屋に到着した。涸沢小屋は標高 2350m、上高地は 1500m だから、約 850m 登ってきたことになる。約 6 時間半の歩行である。ほどなくして、村井会長や山田さん、その他のメンバーも到着した。

前穂高岳の一等三角点と
日本測量協会山の会メンバー

翌朝、4 時半頃目が覚める。穂高岳の山頂部は雲に覆われているが、朝の光に山の斜面が赤く輝いている。天気はまずまずである。今日は、北穂高岳から涸沢岳と難易度の高い山稜を縦走し、奥穂高岳の基部にある穂高岳山荘までの行程である。朝食をとり 6 時半頃出発する。最初に雪渓が現れる。かなりの傾斜である。階段状に切ってあるが、その段差が大きい。この雪渓の登りで相当体力を消耗した感じがする。この雪渓を越えると岩屑状の斜面をジグザグに登っていく。仲間のメンバーは会話を交わしながら登っていくが、私にはその余裕はない。ただ黙々と登っていく。降りてくる人に出会う。「半分きてますか？」「半分はきていないけど、3 分の 1 以上はきているでしょう。この上に鎖やはしごが出てきますよ。」まだ登りは長いなと思いながら何とかがんばって登っていく。鎖場やはしご

を記憶できないほど登り、北穂高岳から奥穂高岳に続く縦走路に出る。そこから北穂高岳へ最後の登りとなり、北穂高岳(3106m)の山頂に達する。山頂に三角点はない。山頂のすぐ下には北穂高小屋がある。小屋があるとほっとする。

北穂高岳から縦走路に入る。北穂高岳から涸沢岳まで右側に切れ落ちた滝谷を眺め、狭い岩稜上をいく大変な難路である。至る所に鎖場やはしごがあり、ボルトを打ってあるところもある。鎖がなくとも岸壁のくぼみや取っ手となる岩を探してよじ登り、下りは慎重に姿勢を変え、滑らないよう持ち手を放さないよう緊張しながら降りていく。岸壁を横に小さな窪みをたどって移動するところもある。剱岳のカニのヨコバイのようである。緊張で咽がからからになる。水を相当飲んだが、すぐ咽はからから、トイレにも行かない。写

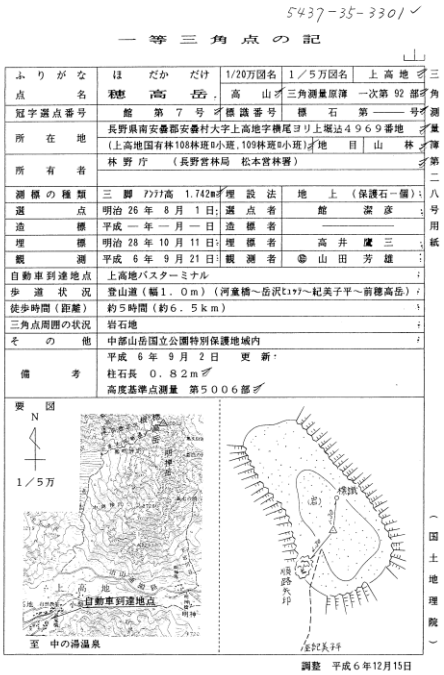
真を撮る余裕もなく、難路の様子をお伝えできる写真があまりなく残念である。

涸沢岳(3110m)には、三等三角点がある。三角点は頂上より少し低い位置にあり、その標高は 3103.1m である。頂上は、岩だらけだが広い。ここからは、今日の泊まり穂高岳山荘が遙か下に見下ろせる。ここまでくれば後は穂高岳山荘に向かって降りるのみで一安心である。一休みした後穂高岳山荘へ岩屑がごろごろした道を下った。この頃から雲が出てきて山荘に着いた頃にはぱらぱらと雨が降り出した。

穂高岳山荘は結構混んでいた。外国人の登山客も多い。5 時には夕食を食べ、6 時頃には寝床に横たわった。最近の山小屋の食事はおいしい。暖かいものが出てくるし、品数も多い。寝床がもう少し広くなれば言うことなしである。

翌朝 4 時半頃目が覚めると深い霧である。登山路は濡れているかもしれない。山田さんが 6 時まで様子を見るという。他のグループは出発した人たちもいる。山田さんが大丈夫だから行きましょうと 6 時過ぎに出発する。今日は、奥穂高岳に登り、吊尾根を経て一等三角点のある前穂高岳に登り、重太郎新道を通って岳沢を下り、上高地からそれぞれ帰路につく。

穂高岳山荘からいきなり鎖、はしごの直登である。この直登でかなり高度を稼げる。穂高岳山荘のあるコルは標高 2983m なので約 200m の登りである。直登の上はややなだらかになるが、岩屑のザレた道である。あえぎあえぎ登っていくと山頂(3190m)に達する。山頂はあまり広くない、人工的に岩を積んだ上に祠がある。韓国からの登山者がいっぱいいる。祠と一緒に一人ずつ写真を撮っている。混雑してなかなか道を譲ってくれない。霧が深い。祠の裏の平場に退避して休憩を取る。休憩もそこそこに吊り尾根を下り始める。


5437-35-3301

一等三角点の記

ふりがな	ほだかだけ	1/20万図名	1／5万図名	上高地	
点名	穂高岳	高山	三角測量原簿	一次第 92 部	
冠字選点番号	館 第 7 号	標識番号	標石 第 —— 号		
所在地	長野県南安曇郡安曇村大字上高地字横尾ヨリ上堀込４９６９番地				
	(上高地国有林108林班ロ小班,109林班ロ小班)		地目	山林	
所有者	林野庁 (長野営林局 松本営林署)				
測標の種類	三脚 ｱﾝﾃﾅ高 1.742m	埋設法	地上 (保護石一個)		
選点	明治 26 年 8 月 1 日	選点者	館 深彦		
造標	平成 一 年 一 月 一 日	造標者	——		
埋標	明治 28 年 10 月 11 日	埋標者	高井 鷹三		
観測	平成 6 年 9 月 21 日	観測者	㊞ 山田 芳雄		
自動車到達地点	上高地バスターミナル				
歩道状況	登山道(幅1．0m)(河童橋～岳沢ﾋｯﾁｭｳ～紀美子平～前穂高岳)				
徒歩時間(距離)	約5時間(約6．5km)				
三角点周囲の状況	岩石地				
その他	中部山岳国立公園特別保護地域内				
備考	平成 6 年 9 月 2 日 更新 柱石長 0．82m 高度基準点測量 第5006部				

要図

調整 平成6年12月15日

三角測量簿第二八号用紙

(国土地理院)

前穂高岳一等三角点の「点の記」

前穂高岳(3090m)は比高差約 200m、急な岩場を登る。約 45 分で前穂高岳の山頂に達する。一等三角点(3090.2m)がある。標石の周囲は欠けて補修されている。IC タグがついておりインテリジェント基準点のようだ。一等三角点の前で測量協会山の会のメンバー 4 人で記念撮影する。

いよいよ後は下山のみである。しかし下りは油断禁物である。事故は下山中に起こることが多い。これから下る重太郎新道は名にし負う厳しい下山路である。紀美子平に戻る。そこから重太郎新道である。遙か下に岳沢小屋が見える。この 23 日に開業したばかりの山小屋である。重太郎新道は、鎖、はしごの連続である。高度感のある岩場にちょっとし

た足場が切ってある。それを頼りに鎖を使い登山靴と岩の摩擦を利用して降りていく。森林限界のあたりまで降り、岳沢パノラマというこぶ状の平場があり、岳沢の雄大な景色を眺めながら弁当を食べる。穂高岳山荘で作ってもらった弁当は、朴の葉で包んだ寿司が二つと鮎の甘露煮である。山小屋の弁当も進化したものだ。

再び尾根を下っていく。また鎖場やはしごが現れる。40 段のはしごもあった。さらに下り岳沢の河原を渡って岳沢小屋についた。前穂高の山頂から 3 時間近くかかっている。岳沢小屋は竣工したばかりのきれいな山小屋で、前身の岳沢ヒュッテが雪崩で崩壊したため場所を変えて再建されたものである。

岳沢小屋で今回のグループの解散式を行う。後は三々五々上高地に向かって 2 時間ばかりの長い道のりを降りた。途中に風穴などがあり、林間の結構急な道を降り、上高地に到着したのは午後 3 時を過ぎていた。

測量・地図に携わる人々には、この大地や自然に愛着と関心を持っている人々が多い。私にとっては、未知の土地を訪ね、その自然やそこに暮らす人々の生活、歴史文化を知ることは大いなる喜びである。山に登るのもその喜びの一つであり、登っているときは苦しいが、その自然に親しみ大地に自らを一体化することは何ものにも代えられない。その山を測量し地図にしてその山の姿を我々に伝えてくれていることが山に登ろうという意欲をおこし、安全に登るための道しるべとなっている。小さく地味な三角点標石であるが、先人の苦労とその成果が我々を導いていると思うととてつもない大きな人類の歴史の足跡であると感じるのである。今後も体力の続く限り村井会長と語らって測量に因んだ山を登りたいと思っている次第である。